

# 令和2年度 只見町ブナセンターの企画展パネルおよび『観察の森』木製標柱は、森林環境交付金事業補助金を活用しています。



## 企画展 只見の養蚕



「只見の養蚕」



## 「只見の野生動物とその生態」の調査にあたって

只見町の面積は753km<sup>2</sup>で、そのうちの約9割が森林に覆われています。森林の影響を強く受け常緑広葉樹やブナ林をはじめとした様々な森林からなるモザイク植生が形成し、多種多様な自然環境が形成されています。また、高山には原生的な状態で広大な自然林が残されていることから、多くの野生動物が生息しています。野生動物のうち、哺乳類は現在地球上に約500種、日本には約120種が生息しているとされています。只見町では、27種の哺乳類が確認されています。しかし、これらの哺乳類の多くは移行性・季節性であるため、私たちが直接目撃する機会も多くはなく、その生態についてもあまり知られていません。また近年は、日本の各地でツキノワグマによる森林被害や人身被害が発生し、イノシシやコウゾリノシシの出現も増えており、大きな社会問題となっています。只見町のような山間地域では、野生動物と関わり合いを生かしていかねばならず、その生態について知る必要があります。

この企画展は、過去に只見町ブナセンターが開催した企画展「只見の自然に生きる」只見の野生動物とその生態」のバリエーションの一部改訂を行っています。只見町で確認されている哺乳類についてその生態をセンサーカメラが撮った写真などをまじえて紹介し、さらには、人と野生動物の関係としての役割、只見町の生態系を脅かす上とする大型哺乳類や外来生物の問題についても紹介します。

## ニホンイノシシ *Sus scrofa leuconotus* イノシシ科イノシシ属

イノシシは、北アフリカからユーラシア大陸に分布しており、日本に生息するのは日本固有種であるニホンイノシシです。ウシ科に属する大型哺乳類で体長90～100cm、体高125～145cmになります。イノシシは、古くから狩猟資源として利用される一方、農耕が行われるようになると農地を荒らす害獣としても扱われてきました。江戸時代には、増加したイノシシが農作物を食い荒らし、悪徳（イノシシ殺し）と呼ばれる害を及ぼしたこともありました。近年は全国的に分布が拡大してしまいましたが、明治時代から大正時代にかけて過度な土地利用や保護によるその分布地域は縮小しました。ところが、減反政策などによる土地利用の縮小や保護の減少を背景として、昭和前期から現在までの間に分布域が拡大し、個体数も各地で増加しています。

イノシシは、かつての分布域から30cm以上の積雪が70日以上続く環境には生息しないと考えられていました。しかし、近年、福島県内で多量発生とされる会津地域において広く生息が確認されています。只見町でも2004年頃から発生が始め、2009年、2020年には格別で発生し、各地あるいは人家周辺での被害の発生が報告されており、個体数が増加していると考えられます。こうした背景には、近年の冬季の少雪によるイノシシの分布の拡大と繁殖が考えられます。また、それに伴い水田における稲の減少などによる農圃の拡大も確認されており、今後只見町におけるイノシシの生息状況を調査しつつ、その状況に応じて、さらなる農圃被害を拡大させないために早期での個体数管理を講じていく必要があります。

「只見の野生動物とその生態」



## はじめに

本企画展は、2014年に開催した企画展「只見の天然資源とその利用」の中から「冬の暮らしと手仕事」に焦点を絞って再編したものです。冬の企画展では、只見の豊かな自然環境における天然資源の多様性、暮らしの中で育まれたそれらの巧みな手仕事を体系的に紹介しました。今回の企画展では只見町の自然環境の調査の各に目し、只見の冬の暮らしを支える天然資源とその利用について紹介します。

只見は日本有数の豪雪地です。降雪は例年11月に始まり、2月には積雪となります。平地でも最大積雪量は2mを超え、積雪が落ちるのは4月中旬下旬です。およそ半年の積雪の中で暮らすこととなります。只見の人々は長い冬を乗り切るために、天然資源を活かして様々な手仕事をします。冬の暮らしを支えるためにブナ材などの樹皮を煮詰めた、煮詰めた山菜・キノコ・米の皮・魚油などの保存食が作られます。

雪がもたらす厳しい・社会的条件を背景に、冬の伝統を継承しながら独自の文化も発達しました。正月は年一度の賑わいであり、年越しのための準備が整えられたらうと、新年を迎えるための準備が整えられます。冬の厳しい寒さを耐え、食料を確保し冬を乗り切る文化も発達しました。さらに、積雪によって村と村との往来が困難になり、集落ごとに独自の文化も発達しています。

冬は自然環境に恵まれます。身近な自然資源を材料として生活を支える様々な道具や手仕事をこの時期でも行われます。雪はこうした手仕事をより進めるための天然資源に働きかけ、花巻の産物を支える手仕事は決まっています。それらを支える手仕事は伝統的な技術や手仕事を継承し、新たな文化を生み出すとともに、自然環境の恵みを受け、暮らしながら、自然環境を育みながら独自の文化も発達しています。

雪は自然環境の恵みを受け、暮らしながら、自然環境を育みながら独自の文化も発達しています。雪は自然環境の恵みを受け、暮らしながら、自然環境を育みながら独自の文化も発達しています。

## おわりに

これまでのパネルで紹介してきたように、只見の人々は長い冬を支える天然資源や自然環境を背景として暮らしてきました。暮らしを支えるために様々な手仕事を育み、それらを支える手仕事は伝統的な技術や手仕事を継承し、新たな文化を生み出すとともに、自然環境の恵みを受け、暮らしながら、自然環境を育みながら独自の文化も発達しています。

雪がもたらす厳しい・社会的条件を背景に、冬の伝統を継承しながら独自の文化も発達しました。正月は年一度の賑わいであり、年越しのための準備が整えられたらうと、新年を迎えるための準備が整えられます。冬の厳しい寒さを耐え、食料を確保し冬を乗り切る文化も発達しました。さらに、積雪によって村と村との往来が困難になり、集落ごとに独自の文化も発達しています。

雪は自然環境の恵みを受け、暮らしながら、自然環境を育みながら独自の文化も発達しています。雪は自然環境の恵みを受け、暮らしながら、自然環境を育みながら独自の文化も発達しています。

「只見の天然資源とその利用」

## 企画展パネル（一部の例）



『ただみ観察の森』木製標柱